



記録誌の発行にあたって

57年ぶり2回目の日本開催となった東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が終了して半年余りが経ちました。新型コロナウイルス感染症のまん延により大会は無観客開催となりましたが、連日繰り広げられる選手たちの熱戦やパフォーマンスは、私たち観る者に対し多くの感動や共感をもたらしました。

川崎市は、東京2020大会に出場する英国オリンピック・パラリンピック代表チームの事前キャンプを、横浜市、慶應義塾大学とともに英国のホストタウンとして受け入れました。事前キャンプとは、選手団が選手村に入る前にコンディションを整えるために行うもので、川崎市等々陸上競技場では、300人近い英国代表チームの選手・スタッフがトレーニングに汗を流しました。

受入れの準備は約6年前から始まりましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により東京2020大会、そして

事前キャンプ受入れが1年延期となり、感染症対策に万全を期しながらの事前キャンプの運営は、大変困難な感じ取りを迫られるものとなりました。選手との直接的な交流事業も行うことができなくなるなど、当初の想定と大きく異なってしまった面も多々ありました。しかしながら、英国オリンピック委員会及び英国パラリンピック委員会との強固なパートナーシップのもと、現場で試行錯誤しつつも、互いに連携・協力しながら代表チームの選手・スタッフを選手村へ送り出し、無事事前キャンプを終えることができたことは、本市にとっても大きな自信と誇りとなりました。英国オリンピック・パラリンピック代表チームは東京2020大会で優秀な成績をおさめられ、「川崎はこれまで行ってきなかでも最高のキャンプ地だった」との評価をいただいたことは、大変嬉しいことです。

今回の事前キャンプ成功の裏には、運営をサポートした職員や施設スタッフだけではなく、市の保健所や公園管理者、そして市民ボランティアなど、多くの関係者の努力と最大限の協力がありました。特に、ボランティアの皆

さんは、コロナ禍で多くの制約や制限があるなかでも、チームワークをいかしてさまざまなアイデアを実行に移し選手やスタッフに精一杯のエールを送り、川崎市として最大限のおもてなしをすることができました。受入れ側の気持ちがひとつとなり、しっかりと選手やスタッフに伝わったことが、英国代表チームの東京2020大会での活躍、そして「最高の事前キャンプ地」との評価につながったのではないかと思います。今では英国は私たちの大切な友人の国となりました。この記録誌は、これまでの英国代表チーム受入れに向けた準備や調整、機運醸成の取組、そして受入れ時のさまざまな活動内容を振り返り、関係者の方々の率直な感想などもいただきながら、「記録」、そして「記憶」として残すため、現時点をひとつの区切りとして取りまとめたものになります。

川崎市では、東京2020大会を契機として、障害のあるなしにかかわらず、誰もが暮らしやすいまちづくりを進めていく取組「かわさきパラムーブメント」を2016（平成28）年度から進めてまいりました。東京2020大会が終

わり、共生社会の実現に向けた本市の新しいステージの幕が開けたところでもあります。今回の英国代表チームの事前キャンプ受入れにあたっては、新たな気付きもたくさんありました。それらを糧として、今回受入れに関わってくださった方々には是非これからも一緒にまちづくりに関わっていただければ幸いです。かわさきパラムーブメントの更なる展開に向け、より多くの市民の皆さまと一緒に、事前キャンプ受入れの経験をまちづくりの実践へとつなげていきたいと思ひます。

2022（令和4）年3月

川崎市長
福田 紀彦



1	英国代表チーム受入れの経緯と 6年間に渡る取組を振り返る	5
	川崎市・横浜市・慶應義塾大学 三者合同での事前キャンプ受入れ	6
	英国オリンピック代表チーム受入れに向けたこれまでの取組	10
	英国パラリンピック代表チーム受入れに向けたこれまでの取組	12
2	2021年夏 英国代表チーム川崎キャンプの全容	15
	【事前キャンプの概要】オリンピック代表チーム「Team GB」	16
	【事前キャンプの概要】パラリンピック代表チーム「ParalympicsGB」	20
	事前キャンプでの等々力陸上競技場各諸室の使い方	22
	サポーター事業の経緯及びキャンプ期間中の活動概要	24
	事前キャンプでの新型コロナウイルス感染症対策	28
	事前キャンプ期間中の公開練習や選手からのメッセージ	31
	事前キャンプ期間中の選手団への応援装飾の実施	33
	英国オリンピック委員会からのメッセージ	36
	英国パラリンピック委員会からのメッセージ	37
3	英国応援機運の醸成や事前キャンプ受入れ 周知にかかる幅広いエンゲージメント活動の展開	39
	事前キャンプに向けた機運醸成にかかるさまざまなイベントの実施	40
	事前キャンプPR大使を活用した機運醸成	44
	機運醸成に向けたPRグッズやチラシの制作	46
	公共施設や公共交通機関での広報・広告の展開	49
	大会延期後の広報活動	52
	事前キャンプ受入れ終了後の振り返り活動	54

4	事前キャンプ運営を支えた人たち	57
	思い出をカタチに残そう！ふたたび集うサポーターの仲間たち	58
	サポーターからの一言メッセージ	63
	事前キャンプ担当者が振り返る苦労と感動	66
5	英国代表チーム受入れにあたっての 川崎市ならではの特色ある取組	73
	【本市独自の取組①】 パラリンピック選手団移送のための市立特別支援学校スクールバスの活用	74
	【本市独自の取組②】サポーター活動におけるSNSの導入と活用実績	77
	英国代表チーム川崎キャンプ推進協議会の活動	80
	保育園・学校給食における応援	82
	【英国との交流事業①】スポーツや文化での英国との交流	85
	【英国との交流事業②】ブリティッシュ・カウンシルとの連携による取組	87
資料編	英国代表チーム川崎キャンプ 受入れにかかる各種アーカイブの紹介	89
	映像で振り返る事前キャンプ	90
	英国応援デザインロゴ制作とGOGB 2020ウェブサイト	92
	英国代表チーム川崎キャンプ選手名鑑	94
	川崎市における英国オリンピック代表チーム及び パラリンピック代表チーム事前キャンプ受入れ等にかかる主なできごと	110
	川崎市における東京2020大会に向けた事前キャンプ受入れ準備体制	112
	謝 辞	113

1

英国代表チーム受入れの経緯と6年間に渡る取組を振り返る

Looking back on our journey of hosting the British national team and our initiatives over the past six years.



東京2020オリンピック競技大会開会式での英国選手団



東京2020パラリンピック競技大会閉会式での英国選手団

●呼称の省略

本書では、団体名称などについて一部を除き略称を掲載しています。

名称	略称
英国オリンピック委員会 British Olympic Association	BOA
英国パラリンピック委員会 British Paralympic Association	BPA
東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会	東京2020大会
日本オリンピック委員会	JOC

●著作権等の取扱いについて

英国オリンピック委員会 (BOA)、英国パラリンピック委員会 (BPA) のロゴマーク及び代表チームの呼称 (Team GB/ParalympicsGB) の著作権等はそれぞれの団体に帰属します。川崎市が使用している英国オリンピック委員会又は及び英国パラリンピック委員会のロゴマークを含むGOGB共通デザインは、関係する団体の承認を得て川崎市、横浜市、慶應義塾大学が作成し、使用しています。

「GOGB 2020」ロゴマークは商標登録済みです(第6214019号)。

川崎市は、横浜市、慶應義塾大学と合同で東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に出場する英国代表チームの事前キャンプを受け入れた。

代表チームの受入れのきっかけは2015年の英国オリンピック委員会の視察に遡る。東京2020大会の1年延期を経て、2021年の夏の事前キャンプ本番までに至る間、本市は英国オリンピック委員会、英国パラリンピック委員会、横浜市、慶應義塾大学と連携してともにさまざまな困難を乗り越えてきた。本記録誌では、英国代表チーム受入れにかかる6年間の軌跡を、さまざまな角度から振り返り、記録として未来に伝えていく。

Ahead of the Tokyo 2020 Games, Kawasaki City hosted the pre-games preparation camps for the British national team, in collaboration with the City of Yokohama and Keio University. The beginning of our journey dates back to a visit made by the British Olympic Association (BOA) in 2015. After the Tokyo 2020 Games were postponed for a year, we had to overcome a number of difficulties in the run-up to the preparation camps together with BOA, the British Paralympic Association (BPA), the City of Yokohama, and Keio University. Through this report, we will look back on our six-year journey of hosting the British national team from various viewpoints for future reference.

川崎市・横浜市・慶應義塾大学 三者合同での事前キャンプ受入れ

川崎市・横浜市・慶應義塾大学 三者合同で 受入れ準備を開始

川崎市は、横浜市、慶應義塾大学と合同で、東京2020大会における英国代表チームの事前キャンプを2021(令和3)年夏に受け入れた。受入れのきっかけは2015(平成27)年8月の英国オリンピック委員会(BOA)担当者の訪日に遡る。事前キャンプ候補地を探すため、日本オリンピック委員会(JOC)を通じて等々力陸上競技場など川崎市内や横浜市内のスポーツ施設を視察したことが具体的な話へとつながった。翌2016(平成28)年1月、川崎市と横浜市は内閣官房ホストタウン構想の第1次登録による英国のホストタウン登録を行った。2月には川崎市・横浜市・慶應義塾大学の三者とJOC、BOAとの間で事前キャンプ受入れに向けた覚書(MOU)を締結。その後6年間に渡り、三者で英国代表チームの受入れに向けた準備を進めていくこととなった。

三者合同で行ってきた取組は多岐



三者でのBOAとの覚書締結式(2016年2月)

に渡るが、2016(平成28)年2月の慶應義塾大学日吉キャンパスでの覚書締結式を皮切りに、BOAとの契約締結式(2017年3月)、続いて英国パラリンピック委員会(BPA)との覚書締結式(2018年5月)、そして事前キャンプ受入れに向けた英国側との協議や受入れ準備など、約6年に渡り関係者が協力して取組を進めてきた。また、三者が一体となって英国応援機運を高めていくため、日英2言語で取組を発信するウェブサイトも2018(平成30)年8月に開設し、同年10月

には英国応援のためのロゴマークとキャッチフレーズ(GOGB 2020: ゴーギービー ニーゼロニーゼロ)を策定し、幅広い広報活動を展開した。

三者間では意見の衝突もあれば毎年の担当者の異動、さらには新型コロナウイルス感染症拡大による大会延期に伴う膨大な調整事項の発生など、紆余曲折も多々あったが、目標を共有して事前キャンプ受入れに向け幅広い事業を連携して展開してきた。このように三者がそれぞれの思いを尊重しながら、対等な関係で十分協議を深めながら受入れ準備を進めてきたことで、英国代表チームという大所帯の事前キャンプを事故なく受け入れることができたといえよう。

また、英国代表チーム受入れに向けたさまざまな調整局面においては、その都度川崎市議会へ報告・情報提供を行ってきた。市議会の全面的なサポートをいただきながら、長期間に渡る準備を進めてきたことも、本市でのスムーズな事前キャンプ受入れにつながったといえる。

英国代表チーム 事前キャンプ実施概要

東京2020大会時には、英国オリンピック及びパラリンピック代表チームは横浜市みなとみらい地区の宿泊施設や慶應義塾大学日吉キャンパスに宿泊し、川崎市等々力陸上競技場、横浜市国際プール、慶應義塾大学日吉キャンパス内にて時差調整やトレーニングを行った。オリンピック選手団の人数は約630人、パラリンピック選手団は約190人、うち川崎市では、オリンピックのサッカー(女子)、ラグビー(7人制、男子・女子)、陸上競技、パラリンピックの陸上競技を受け入れた。

各施設でのトレーニング期間は異なるが、三者全体としての受入れ期間は、7月1日にBOAの事前キャンプ担当者が宿泊施設に到着し、8月4日午前チェックアウトしたあと、引き続き同日午後BPAの事前キャンプ担当者が到着し、9月3日にチェックアウトするまでの2か月強の期間となる。この間、三者で合同運営本部を設置・運営し、英国代表チームの事前キャンプを全面的にバックアップした。コロナ禍での事前キャンプ運営には多くの制限・制約が伴い、事前キャンプ受入れ決定時には想定もしていなかったキャンプ運営となった。

コロナ禍で困難を極めた 受入れ準備

①ホストタウン受入れマニュアルの作成(川崎市・横浜市)

新型コロナウイルス感染症対策が最重要課題となった東京2020大会では、国の方針に基づき、外国選手団の事前キャンプを受け入れる全国のホストタウン自治体は、感染症対策を記した「ホストタウン受入れマニュアル」を作成することが必須となっ

▶英国代表チーム事前キャンプ受入れ結果 概要

英国代表チーム事前キャンプ全体の規模
オリンピック代表チーム:約630人、パラリンピック代表チーム:約190人

川崎市(川崎市等々力陸上競技場)

- オリンピック代表チーム
〈期間〉2021年7月2日～8月5日
(トレーニング使用期間:7月9日～8月1日)
〈人数〉約200人
〈競技〉サッカー、ラグビー、陸上競技
- パラリンピック代表チーム
〈期間〉2021年8月11日～9月2日
(トレーニング使用期間:8月14日～30日)
〈人数〉約90人
〈競技〉陸上競技



横浜市(横浜国際プール)

- オリンピック代表チーム
〈期間〉2021年7月12日～8月5日
(トレーニング使用期間:7月12日～31日)
〈人数〉約50人
〈競技〉競泳、飛込
 - パラリンピック代表チーム
受入れなし
- ※両代表チーム受入れ期間を通じ、横浜カントリークラブ及びパシフィコ横浜ペDESTリアンデッキをランニングやトレーニング用に使用



慶應義塾大学 日吉キャンパス

- オリンピック代表チーム
〈期間〉2021年7月8日～8月7日
(トレーニング使用期間:7月9日～8月1日)
〈人数〉約400人(トレーニングのみの使用を含む)
〈競技〉アーチェリー、バドミントン、水泳競技、ボクシング、フェンシング、体操競技、柔道、ホッケー、近代五種、ウエイトリフティング、テコンドー、卓球、ボート、自転車 等24種目
- パラリンピック代表チーム
〈期間〉2021年8月13日～9月1日
(トレーニング使用期間:8月14日～9月1日)
〈人数〉約100人(トレーニングのみの使用を含む)
〈競技〉アーチェリー、バドミントン、柔道、テコンドー、パワーリフティング、ウィルチェアフェンシング、ボート、馬術



た。川崎市・横浜市の両市もマニュアルを作成し、英国側と協力してキャンプ期間中の感染症対策の検討を始めたのが2021(令和3)年の年頭である。大会延期の決定以降、開催の行方が不透明ななかで、BOA、BPAと定期的にオンライン会議を行い、選手団の各行程での具体的な感染予防対策や双方の責任体制など詳細に渡って考え方を整理した。また、感染症対策に関する遵守事項について双方が合意した上で選手団を受入れ、入

国時には誓約書の提出を求めるなど、受入れ直前まで関係者間でのさまざまな合意形成や手続に追われた。

②合同運営本部の設置・運営

(川崎市、横浜市、慶應義塾大学)

数百名規模で選手団が複数の宿泊施設・トレーニング施設に分かれて滞在し、施設間を行ったり来たりする一方、選手団の情報管理や感染症対策などは一元的に行う必要があるため、三者合同運営本部を設置して統合的な運営を行うことが不可避と

英国パラリンピック委員会と川崎市・慶應義塾大学・横浜市との東京2020大会事前キャンプ覚書締結式
Signing Ceremony of MOU for the Tokyo 2020 Paralympics GB Preparation Camp by the British Paralympic Association and City of Kawasaki, Keio University, and City of Yokohama



三者でのBPAとの覚書締結式(2018年5月)

なった。事前キャンプ担当者が入国する7月1日から帰国前日の9月2日まで、みなとみらいの宿泊施設の一部を借り上げ、横浜市職員と川崎市職員が常駐し、川崎市等々力陸上競技場、横浜市国際プール、慶應義塾大学日吉キャンパスの各運営本部とをつなぎ、三者の職員・スタッフ、委託事業者間で毎夕オンライン定例会を開催し、日々のトラブルや課題などの情報共有を行った。重なる疲労を吹き飛ばすような新たな課題やトラブルが連日発生するなかで、スタッフ同士の連帯感は日々深まっていった。

③事前キャンプ運営における

川崎市・横浜市両市の役割分担

事前キャンプにおける感染症対策の実施にあたっては、宿泊施設は横浜市内、トレーニング会場は横浜市と川崎市の両市にまたがり、従事者も川崎市、横浜市、慶應義塾大学それぞれの関係者、現場スタッフ、委託事業者と多岐に渡る。特に新型コロナウイルス感染症の陽性者が発生した場合は、宿泊地である横浜市保健所の管轄となるため、ホストタウンである川崎市と横浜市の間で事前に主たる責任体制について協議し、役割分担を整理した上で両市で覚書を締結し、それに基づく感染症対策事業を実施することとした。宿泊施設での感染症対策や選手団・宿泊施設関係者のPCR検査、陽性疑いが発生した場合の保健所や医療対応は主に横浜市が、感染症対策のための選手団の専用車両での移動に関する対応や事務手続は川崎市が対応することになった。選手団の規模が大きいため、両市とも英国側との調整や受託事業者の選定、実際の運営が始まってからは連日の突発事項や要望への対応に振り回されながらも、どうか無事に事前キャンプを乗り切ることができた。

事前キャンプ受入れの 多様な担い手

コロナ禍にも負けずに強固なパートナーシップのもと事前キャンプを受入れることができた三者であるが、それぞれに運営本部を担った関係者が大勢いる。

川崎市の場合、実務担当の市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室の事前キャンプ担当に加え、エンゲージメント担当など他班の職員も機運醸成や連携事業に携わり、キャンプ期間中は室一丸となってシフト体制を組み等々力陸上競技場や宿泊施設での本部運営にあたった。また、等々力陸上競技場での活動はオリンピック・パラリンピック推進室の職員だけでは対応しきれず、市民文化局の職員にも運営支援を依頼しシフトに入ってもらった。マニュアルを渡され当日現場で初めて顔合わせをし、指示を待つまでもなく黙々と目の前の業務にあたる応援職員の姿が今でも脳裏に焼き付いており、頭が下がる思いである。競技場の使用方法や用器具の手配などの詳細は、施設を管理する中原区役所道路公園センターや委託事業者である(公財)川崎市公園緑地協会のスタッフに負うところが大きく、彼らの助言やサポートを受けながら二人三脚で英国選手団をサポートしていった。



台風前に高跳びの用器具を片付けるスタッフ

この他にも等々力陸上競技場を普段から使用しているスポーツ団体をはじめさまざまな関係者にありとあらゆる場面で御協力をいただいた。また、川崎市議会議員の皆さまにも英国代表チームへの応援活動等で多大なる御協力をいただいた。さらに、感染症対策に関しては本市の保健衛生部門の助言なくしては前に進むこともできず、第5波への対応で忙殺されている中でも迅速かつ温かな対応をいただいたことを強調しておきたい。

事前キャンプが終了してひと月後の2021(令和3)年10月1日には、小規模な人事異動によりオリンピック・パラリンピック推進室も減員となり、事前キャンプに携わった職員も一部異動となった。川崎市だけではなく、横浜市、慶應義塾大学でもオリンピック・パラリンピック担当部門に異動があり、すでに新たな職務に従事している関係者も多い。BOA、BPAにおいても8月末や9月末で契約期間が終了した担当者もおり、サッカーワールドカップなど、次なる大規模競技大会の運営を担う業務に就いているなどと聞く。

事前キャンプは選手団が主役であり、受入れ側は全て縁の下のかたちである。数年に渡り緊密な連携を取りながら、ともに業務に携わったメンバーもいれば、オンラインでしか顔を合わせる機会がなかったメンバーもいる。事前キャンプに従事したほんの一時のみ、時間と空間を共有したメンバーもいる。今回の事前キャンプ受入れは一期一会のイベントではあったが、関わってくださった人たちが全て同じ目的を共有していたからこそ、ワンチームとしてコロナ禍でも無事成し遂げることができた。この場を借りて、御協力いただいたすべての方々へ心より感謝申し上げます。



事前キャンプ終了後、三者合同でのスタッフで記念撮影



等々力陸上競技場の管理運営を担ったスタッフたち

英国オリンピック代表チーム 受入れに向けたこれまでの取組

2016年から始まった 受入れ準備

2016(平成28)年2月に英国オリンピック委員会(BOA)と事前キャンプ受入れに向けた覚書(MOU)を締結した川崎市は、同年4月にオリンピック・パラリンピック推進室を設置、8月にはBOAのリオ2016大会の事前キャンプ地であるブラジルの地方都市ベロ・オリゾンテへ職員2名を派遣し、受入れに向けた準備を本格的に開始した。



ベロ・オリゾンテでBOA事前キャンプを受け入れた施設責任者との意見交換(2016年8月)

翌2017(平成29)年3月には横浜市、慶應義塾大学と合同でBOAと施設貸借に関する契約を締結し、本市もBOAとの契約に基づき、CEOのビ



BOAのCEOスウィーニー氏による講演会(2018年12月)

ル・スウィーニー氏(当時)を招いた市民向け講演会を開催、2019(令和元)年には、IAAF世界リレー2019横浜大会に参加した英国陸上チームと市立高等学校陸上部生徒との交流事業や、事前キャンプ時に活動するボランティア「英国代表チーム川崎キャンプサポーター」の募集・研修の実施など、市民への情報発信や交流事業を展開してきた。また、文化芸術分野での交流として、英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルとの連携事業を2017(平成29)年から開始し、市立学校の児童・生徒や市内で活動する文化芸術団体の参加を得ながら、英国の音楽団体やダンス団体等を講師に

迎えた連携事業を毎年継続して実施している。

年を追うごとに増す 視察の受入れ

BOAの視察も2020(令和2)年に近付くにつれ頻繁となり、当初は市職員が毎回案内を行っていたものが、次第にはBOAスタッフ自らが視察団を先導して競技場内部を微に入り細に入り案内して綿密な調査を行うようになった。BOAは事前キャンプ担当者だけではなく、移送担当、選手団全体の運営担当、パフォーマンス担当、広報担当など、各担当分野に特化して視察を行い、2019(平成31)年はほぼ毎月のように視察団を受け入れた。新型コロナウイルス感染症の世界的なまん延を受け、2020(令和2)年3月を最後に直接訪問は中止となったが、それまでの間の視察受入れ回数は30回近くに及んだ。

コロナ禍での事前キャンプ 受入れに向けて

2020(令和2)年3月24日に東京



リオ2016大会時に英国陸上チームがトレーニングを行った
ミナス・ジェライス州立大学の陸上競技場(2016年8月)



来日したBOAスタッフと意見交換を行う
川崎市の等々力競技場担当者(2018年11月)

2020大会の延期が決定したことに伴い、川崎市とBOAは事前キャンプ実施と施設貸借に関して再確認を行い、7月に契約を改訂した。それ以降は選手団の受入れ直前まで細かな事項に至るまで全てオンラインで協議・調整を進めることとなった。

英国代表チームの事前キャンプは2021(令和3)年夏に予定どおり実施されたが、当初予定されていた選手・スタッフの小学校訪問や児童・生徒、市民ボランティアとの直接交流は感染症対策のため全て中止に。また、緊急時を除いて代表チームスタッフとのやりとりは全てオンラインや電話、メール等で行うこととなり、握手すらできなかったことは残念なことである。それでも、感染症対策を徹底しての公開練習の実施やボランティアによる選手団のサポート活動が実現できたことに加え、フェンス越しに市民の方々が選手団をもてなし、選手団もそれに応えるなどの草の根交流がキャンプ期間中、随所で見られたことは小さいながらも心に残るレガシーとなった。



等々力陸上競技場での英国陸上チーム視察団受入れの様子(2019年5月)



BOAの新たなCEOアンソン氏が市庁舎を訪問、福田市長、向坂市民文化局長(当時)と意見交換(2019年11月)

▶BOAに関する主なできごと

- | | |
|----------------|--|
| 2015(平成27)年 3月 | ●日本オリンピック委員会(JOC)とパートナー都市協定を締結 |
| 7月 | ●JOCから本市に対し各国オリンピック委員会の視察受入れへの協力要請 |
| 8月 | ●BOAが等々力陸上競技場を視察 |
| 10月 | ●BOAが等々力陸上競技場等を視察、福田市長とBOAのCEOスウィーニー氏が会談 |
| 2016(平成28)年 1月 | ●横浜市とともに英国を相手としたホストタウン登録
●川崎市・横浜両市による事前キャンプ受入れを共同発表 |
| 2月 | ●川崎市、横浜市、慶應義塾大学、BOA、JOCとの間で事前キャンプ受入れに向けた覚書を締結 |
| 7月 | ●川崎市職員がブラジルのベロ・オリゾンテでのBOA事前キャンプを視察 |
| 10月 | ●福田市長、石田市議会議長、山田川崎市国際交流協会会長が英国を視察、BOA・英国パラリンピック委員会(BPA)事務所を表敬訪問 |
| 2017(平成29)年 3月 | ●川崎市、横浜市、慶應義塾大学とBOAとの間で施設貸借にかかる契約を締結、事前キャンプ受入れが正式に決定 |
| 2018(平成30)年12月 | ●川崎市内でBOAのCEOスウィーニー氏による講演会を開催 |
| 2019(令和元)年 5月 | ●IAAF世界リレー2019横浜大会に出場する英国陸上チームのプレ事前キャンプを等々力陸上競技場で受入れ、期間中に英国陸上チームと川崎市立高等学校陸上部の生徒との交流事業を実施 |
| 11月 | ●BOAの新CEOアンディ・アンソン氏が福田市長を表敬訪問 |
| 2020(令和2)年 6月 | ●東京2020オリンピック開催延期に伴うBOAとの契約改訂 |

英国パラリンピック代表チーム 受入れに向けたこれまでの取組

英国パラリンピック 代表チーム受入れの意義

英国パラリンピック委員会(BPA)は、株式会社である英国オリンピック委員会(BOA)とは異なり、公益・非営利法人のかたちをとり組織規模も小さい。しかしながら、BPAは「スポーツを通じて社会を変革する」というスローガンを掲げ、障害者にとってよりよい社会を創出するための戦略的な目標を設定し、英国代表チームは過去のパラリンピック大会でも常にメダル獲得数上位を争っている。



BPAによる等々力陸上競技場視察の様子
(2019年8月)

2012(平成24)年のロンドンパラリンピック大会が市民の行動変容をもたらしたと言われているように、パラスポーツやパラアスリートが観る者に与える力は大きい。東京2020大会の開催を契機に誰もが住みやすいまちづくりを進めていく「かわさきパラムーブメント」を掲げ、多様な主体を巻き込んで全市的に運動を推進していこうとする川崎市にとって、パラリンピック発祥の地である英国のパラリンピック代表チームを受入れることは自然な流れでもあった。

川崎市とBPAとの 強固なパートナーシップ

BPAが最初に川崎市を訪問したのは、BOA訪問の3か月後となる2015(平成27)年の11月である。5年後の東京2020大会を見据え、担当者は等々力陸上競技場をはじめ市内外の屋内スポーツ施設や宿泊施設のバリアフリー状況をつぶさに確認して



投てきサークルを確認するBPAスタッフ(2019年5月)

いった。翌2016(平成28)年1月にはCEOのティム・ホリングスワース氏(当時)をヘッドとする競技団体も参加する大型視察団が来訪し、視察先をさらに広げ、各競技団体の観点からスポーツ施設の特長や事前キャンプ時に数百人が宿泊できる施設のバリアフリー状況の確認を行うなどした。

さらに同年10月には、ロンドン2012大会でのレガシー形成の取組、英国内のバリアフリーの実態や知見を得るため、福田紀彦川崎市長、石田康博川崎市議会議員(当時)、山田長満川崎市国際交流協会会長(当時)、オリンピック・パラリンピック

推進室職員で構成する川崎市訪問団が、ロンドンにあるBOA、BPAの事務所や障害者スポーツの研究機関を有するラフバラ大学等を訪問した。BPAに対して川崎市が進める「かわさきパラムーブメント」の取組を福田市長から改めて説明したことも、BPAの本市での事前キャンプ実施を強く後押しした。

これ以降、BPAによる視察や事前キャンプ受入れに向けた具体的な検討は、BOAの後を追うように少しずつ進んでいく。2018(平成30)年5月には、BPAと川崎市、横浜市、慶應義塾大学との間で事前キャンプ受入れに向けた覚書(MOU)を締結し、翌年4月には、川崎市等々力陸上競技場において陸上競技を受け入れるための施設貸借契約を川崎市とBPAとの間で締結した。一方、カルッツかわさきや富士通スタジアム川崎での受入れの可能性についても協議を継続していたが、2019年(令和元)9月にBPAが正式に事前キャンプ計画を公表し、これらの施設を使用しないことが確定した。

陸上競技を受け入れることとなった等々力陸上競技場では、トラック・フィールド両競技のトレーニングを予定しており、川崎市側で競技場の改修工事を行う際、投てき用の椅子を固定するための器具を新たに準備することとなった。また以前より川崎市とBPAでは、2020年の大会本番に向けた予行練習を兼ね、事前に市民との交流なども含めた等々力陸上競技場での陸上競技のプレ事前キャ



BPAプリスコー氏らによる講演会(2019年12月)



市長、市議会議員らで構成する川崎市訪問団がロンドンのBPA事務所を訪問(2016年10月)

ンプを行う準備を進めていた。BPAとの強固なパートナーシップのもと、2019年末にはスポーツ局長・選手団長のペニー・プリスコー氏らを招いた講演会を開催し、事前キャンプ受入れに向けた準備を順調に進めていたが、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大を受け、残念ながらプレ事前キャンプの話は立ち消えとなり、20回を超える視察により進めてきた準備も振り出しに戻ることとなった。

難航する調整と心温まる 事前キャンプの受入れ

大会延期の決定を受け、川崎市とBPAは2020(令和2)年9月に契約を改訂し、その後はオンラインにて新型コロナウイルス感染症に関する詳細な対策を詰めながら、事前キャンプ本番を迎えることとなった。パラアスリートは、障害によって体温調整が困難な選手や常時介助が必要となる選手もおり、日本側からの感染症対策の提案はBPAにはそのままでは受け入れられず、事前キャンプの受入れ日程などの大まかな枠組み以外、キャンプ開始まで詳細が固まらないまま選手団を迎え入れることとなった。

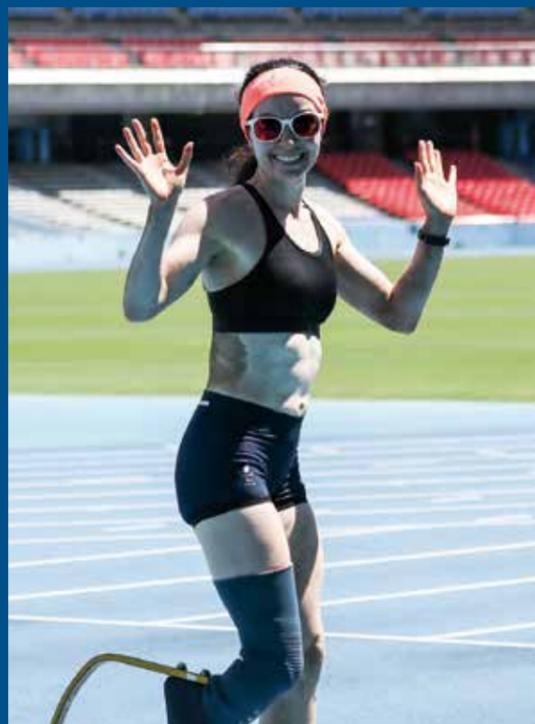
スタッフの入国後も、等々力陸上

競技場にて選手団を管理するBPA側の体制が川崎市側に十分共有されなかったり、陸上競技用器具の利用スケジュールや選手団の移動ロジスティックの詳細が決まっていなかったりと、BPAとは懸案事項を一つひとつ詰めながら事前キャンプを運営していくこととなった。等々力陸上競技場のスタッフは日々用器具のセットアップに振り回され、川崎市担当者は、BPAの事前キャンプ担当者や移送担当者が応答してくれるまで電話とメールを送り続け、連日宿泊施設で待ち構えては詳細を確認していく日々が続いた。それでも、明るく気さくなパラリンピアンやスタッフと毎日あいさつを交わしていくうちに、コロナ禍のソーシャルディスタンス下ではあっても、昔からの知り合いのように互いに笑顔でやりとりすることが日常の風景となった。

オリンピック代表チームとは雰囲気も規模も大きく異なったパラリンピック代表チームの事前キャンプであったが、現場で関わった人たちの心の持ちようや行動を確かに変えていった。関わった関係者は皆、英国パラリンピック代表チームを受け入れることができ本当によかった、と心から思っている。

▶BPAに関する主なできごと

2015(平成27)年11月	●BPAが市内スポーツ・宿泊施設を視察、砂田副市長(当時)を表敬
2016(平成28)年1月	●横浜市とともに英国を相手としたホストタウン登録
10月	●福田市長、石田市議会議員、山田川崎市国際交流協会会長が英国を視察、BOA・BPA事務所を表敬訪問
2017(平成29)年4月	●BPAより事前キャンプ実施の意向書を收受
2018(平成30)年5月	●川崎市、横浜市、慶應義塾大学、BPAの間で事前キャンプ受入れに向けた覚書を締結 ●川崎市が共生社会の実現に向けた取組を推進する「共生社会ホストタウン」として登録
9月	●BPA事前キャンプ責任者アネリ・マクドナルド氏による市職員向け講演会を開催
2019(平成31)年3月	●BPAの新CEOマイク・シャロック氏が福田市長を表敬訪問
4月	●川崎市とBPAとの間で施設貸借にかかる契約を締結、英国パラリンピック代表チーム事前キャンプ受入れが正式に決定
2019(令和元)年9月	●BPAが東京大会での川崎市、横浜市、慶應義塾大学での事前キャンプ計画を公表、川崎市内の使用施設は等々力陸上競技場のみとなること確定
12月	●川崎市内でBPAスポーツ局長・選手団長のペニー・プリスコー氏及びメディカル責任者トム・ポールソン博士による講演会を開催
2020(令和2)年9月	●東京2020パラリンピック競技大会開催延期に伴うBPAとの契約改訂



ステフ・リード選手(パラ陸上競技)



デレク・レイ選手(パラ陸上競技)



ラグビーチーム(女子)

2

2021年夏 英国代表チーム 川崎キャンプの全容

An overview of GB Teams' pre-Games preparation camps in summer 2021



サッカーチーム(女子)

日本国内で新型コロナウイルス感染症が拡大する状況下で始まった英国代表チームの事前キャンプ。川崎市では、英国オリンピックのサッカーチーム(女子)、ラグビーチーム(男子・女子)、陸上チーム、英国パラリンピックの陸上チームを受け入れ、300人近い選手団が川崎市等々カ陸上競技場にトレーニングに訪れた。

コロナ禍で多くの制限や制約があるなかでも、競技場内では市職員や競技場スタッフ、そして市民のボランティアが運営をサポートし、また、競技場の周辺ではさまざまな英国応援装飾を実施するなど、関係者がワンチームとなって英国代表チームのおもてなしを展開した。

In the midst of the COVID-19 outbreak in Japan, the British national team's preparation camps began. Nearly 300 athletes from three sports of the British Olympic team—women's football, men's and women's rugby, and athletics—visited Kawasaki to train at the Todoroki Athletics Stadium.

Despite the many restrictions and limitations due to COVID-19 prevention measures, all parties involved—including not only city officials, but also stadium staff and volunteers selected from among the citizens of Kawasaki—ran the camps as one team, decorating the stadium to create a welcoming atmosphere and to ensure that Team GB/ParalympicsGB felt our warm hospitality (omotenashi in Japanese).

事前
キャンプの
概要

オリンピック代表チーム 「Team GB」

英国オリンピック代表チーム「Team GB」は選手・スタッフあわせて約630人と、日本国内で事前キャンプを行った海外選手団のなかでも最大規模を誇る選手団である。英国は幅広い競技でメダルを狙う強豪国であり、スタッフたちは事前キャンプの成功に向けて直前まで綿密な準備を重ねていた。

川崎市等々力陸上競技場でトレーニングを行ったのはサッカー（女子）、ラグビー（7人制、男子・女子）、陸上競技の選手団約200人程度であり、彼らはみなとみらい地区の宿泊施設から専用車両で等々力陸上競技場へと移動した。コロナ禍の影響でBOAが1年以上現場視察を実施できなかったこともあるのか、当初使用する想定がなかった競技場での専用インターネット回線の整備をはじめ、予告なしの突如の大量の飲料水やトレーニング機器の搬入など、BOAスタッフが未着にもかかわらず現場でのセットアップ作業が次々と発生した。その一方で、今度は選手は到着すれども練習用器具が到着しない、大会延期前に準備完了していたユニフォームなどのボランティア向けキットがシンガポールで滞留して届かないなど、関係者の不安と情報が錯そうするなかで事前キャンプが幕を開けた。

■ キャンプスケジュール

等々力陸上競技場には、第一陣として2021（令和3）年7月9日にサッカーチームがキャンプインし、ついでラグビーチーム、陸上チームと続き、8月1日に全てのトレーニングが終了した。サッカーやラグビーが団

体で行動し、午前・午後と決められたトレーニングメニューをこなすのに対し、選手団のうち最も人数の多い陸上チームは定時運行のシャトルバスに乗り、思い思いの時間にバラバラと競技場へやってきた。トラックでアップをする者もいれば、寝そべて日光浴する者、屋内でジムトレーニングやマッサージをする者など、個々人の状態に合わせたトレーニングが行われていた。また、陸上チームは、投てき選手が補助競技場にて砲丸投げ、円盤投げ、ハンマー投げ、やり投げの練習を行い、フェンス越しに足をとめて練習風景を見学する市民の姿も数多く見られた。

用器具のセットアップや撤収は、内容に応じて英国スタッフが رفتり、競技場スタッフやボランティアが行ったりする場合もあれば、補助競技場の投てきケージの準備やライン引きは市内の法政大学第二高等学校陸上部にお願いすることもあり、必要に応じて多様な人材が選手団の練習をサポートすることになった。また、キャンプ期間中に台風の接近があり一時避難的に用器具の撤収を行ったことがあったが、大きなトラブルもなく事前キャンプを終えることができた。

■ 各競技別の 主なトレーニング内容

① サッカー（女子）

等々力陸上競技場でのトレーニングのトップバッターとなったサッカーチーム。英国代表は女子チームのみが編成されており、選手・スタッフ総勢約40人が7月9日から16日までの8日間、トレーニングを行った。



サイン入りサッカーシューズをサポーターに渡す選手

キャンプ初日には報道各社が敷地の外から選手到着の様子を取材するなか、コロナ禍での静かな事前キャンプが始まった。事前に到着しているはずの練習用具がまだ届かず、急遽川崎フロンターレからサッカーボールを借用するなど、初日からハプニングが発生した。

時期は夏の盛り、午後になると雲が沸き遠方で雷鳴が聞こえるなか、選手たちが真剣に練習に臨む。その傍らでは、市職員やボランティアがチームの女性警備担当者から落雷チェック、不審者チェック、救急設備チェックなどの要望を英語で矢継ぎ早に受け、慣れぬ対応に追われていた。

7月14日には、厚木市で事前キャンプ中のニュージーランドチームと親善試合を実施する運びとなっており、川崎市サッカー協会に女性審判の派遣を、市消防局には緊急対応のための救急車と救急隊の派遣を依頼するなどして当日を迎えた。試合の際は報道はもちろん、川崎市の公式記録映像も撮影許可が下りず、市側のスタッフやボランティアも物陰からしか様子をうかがうことしかできなかったが、実戦さながらの迫力で英国が2-0で勝利した。



サッカー親善試合（白いユニフォームが英国チーム、黒いユニフォームがニュージーランドチーム）

チームの初戦が札幌会場となったことを受け、チームは7月16日午前中等々力で最終トレーニングを行ったあと、羽田へと向かった。去り際には、ボランティアからのおもてなしに感動した選手からキャップやサイン入りシューズが寄贈されるなど、大きな送別の輪ができた。チームは大会で惜しくもベスト8で敗れたが、短くもあたたかな思い出が残された。

② ラグビー（男子・女子）

サッカーチームと入れ違いで等々

力競技場にやってきたラグビーチーム（7人制）は合計約40人程度、男子チームが7月16日から21日まで、女子チームが7月19日から24日まで滞在し、競技場で汗を流した。両チームとも非常にフレンドリーな雰囲気、気軽に記念撮影にも臨んでくれ、サポーターが折り紙で手作りしたくす玉などのプレゼントを大いに喜んでくれた。

また、ラグビーチームのトレーニング期間中、フィールドに高さ13



ホワイトボードに残されたラグビー女子チームからの感謝のメッセージ

メートルのゴールポストが設置された。このゴールポスト及び関連備品は本競技場の改修工事に伴い整備されたもので、普段はサッカーフィールドとして使用されている等々力陸上競技場に白いゴールポストが高くそびえたつ様子は新鮮でもあった。

サッカーチームでは実現しなかった公開練習についても、トレーニング開始後にマネージャーと行った交渉が実を結び、市内ラグビースクールの子もたちが練習を見学できるようになったことはとても嬉しい出来事となった。



ラグビー男子チームとサポーターとの記念撮影



ラグビー男子チームの練習風景



ラグビー女子チームの練習風景

ラグビーチームのトレーニング期間は、すでに陸上チームも到着していたため、男子チーム、女子チーム、陸上チームがお互いの練習スペースを尊重しつつ練習を行っていた。ラグビーチームもサッカーチームと同様、日を追うごとにボランティアのおもてなしに喜び、交流を重ねるようになっており、選手個人のSNSにさまざまなおもてなしの様子がアップされたのも川崎市や等々力陸上競技場の魅力を内外に伝えるまたとない機会となったのではないだろうか。

③陸上競技

オリンピック代表チームで最後までトレーニングを行っていたのは陸上チームである。7月16日から8月1日まで約120人が、それぞれの競技スケジュールをベースに等々力陸上



ハードルを使ってトレーニングを行う陸上選手

競技場を訪れトレーニングを行った。本競技場では競技場スタッフやボランティアが中心となって、ハードルなど各種用器具の準備のほか、走り幅跳びの選手のための砂場の掘り起こし、高跳びの選手のための用器具やマットのセットアップを日替わりで場所を変えて行い、補助競技場では、選手・コーチが徒歩で移動する際のアテンドに加え、投てきケージのネットの上げ下げなどが日々発生した。コロナ禍で選手との接触を避けながら選手の要望に応えるためのサポート作業を行おうとすると、作業に充てられる時間は選手の休憩時間である昼下りの時間帯となってしまい、毎日何かしらのセットアップ作業が炎天下のなか行われ、市側関係者は大粒の汗を流しながら根気強く作業にあたった。その甲斐もあってか、陸上チームも公開練習の開催には快く応じてくれ、多くの子どもたちを競技場へ招くことができた。

事前キャンプ運営体制

英国代表チームの事前キャンプ運営体制は、初動期こそ物品搬入の関係で多少混乱したものの、総じて極めて堅固なものであった。機材の設

営・搬入にあたるため、BOAの等々力陸上競技場担当者が選手のトレーニングが始まる前から現場に常駐し、各競技団体に代わって多種多様な業務を担うとともに、競技団体からの要望を聞いて川崎市側と調整する仲介役を担った。

彼らの主な業務内容は、まず選手が到着する前の業務として、IT担当による競技場内のIT環境の確立、ボランティア担当や等々力陸上競技場担当による事前に船便で搬送したソファやテーブル、バナー等の備品やグッズ等の消耗品の搬入・設置、必要備品の買い出し指示などである（コロナ禍のため、買い出しは市側に要望を伝え市側で対応）。なお、トレーニングジムマシンのセットアップなど専門スタッフが必要な場面では、BOAが手配した国内外の専門業者がBOA担当者とともに設営を行った。

選手のトレーニング期間中は、選手が使用する部屋の消毒やハイパフォーマンスジムの管理、選手・スタッフのお弁当のデリバリー、サポーターへの指示出しなどもBOA担当者が担った。基本的には、必ずBOAの等々力担当者を通じて、市オリンピック・パラリンピック推進室

の職員へ各競技団体からの要望や伝達事項が入るような仕組みとなっていた。また、サッカーや陸上用器具設置の際には、競技場スタッフや市側スタッフだけでは専門的な設営が難しいため、競技団体スタッフの指示のもと用器具を移動したり設置したりするなどした。

また、キャンプ期間中には、BOAのCEOアンディ・アンソン氏が英国代表チームの激励に訪れ福田市長と意見交換を行ったほか、会長であるヒュー・ロバートソン氏が来訪し、ボランティアの歓迎を受けた。

このような手厚いサポート体制のもと、英国オリンピック代表チームは、サッカーがベスト8、ラグビーが男子・女子ともにベスト4、陸上競技が銀メダル3、銅メダル3を獲得し、総メダル獲得数は65個、世界第4位の成績を残した*。

※2021年1月末日時点でのメダル数。英国代表チームの陸上競技男子4×100mリレー（銀メダル獲得）が失格となったため、銀メダル2、総メダル数は64個となった。

メディアデーの実施

英国メディア向けの活動として、

BOAのコミュニケーション担当者2名がほぼ毎日競技場に来場して事前調整を行った上で、事前キャンプ期間中に各競技チームを対象としたメディアデーを複数日開催した。感染症対策のため、英国メディアの入場は事前登録制とし、当日は抗原検査にて陰性となった結果を持参した者のみを入場可能としたほか、出入口や入場可能エリアも屋外のみに限定するなど、対策を徹底しての実施となった。なお、同じ英国メディアでも在京英国メディアは本国からやってきたメディアと同じ取材エリアには入場できず、BOAの広報担当者との直接のやりとりや選手への直接取材も不可となるため、川崎市側で対応し、市内メディア向けに開放した2階メインスタンドから取材してもらうこととなった。

各競技のメディアデー開催に際しては、本市も市記者クラブ所属の報道機関が撮影等を行えるよう交渉した結果、競技場メインスタンドの2階など英国バブル外のエリアからのみ取材が可能となった。感染症対策の観点から選手への直接インタビュー



陸上競技メディアデーでの選手インタビューのひとコマ

はできないため、BOAプレス担当へのインタビューのほかは、ボランティアや公開練習に訪れた市民へのインタビューを行うかたちとなった。本来であればもっと自由に取材を受け入れ、事前キャンプ受入れの様子を広く知ってもらい、英国応援の機運を高める機会となるはずだったが、コロナ禍の厳戒態勢のなか、双方手探りで対応していかざるを得なかったことは残念としか言いようがない。



練習を行う陸上競技棒高跳び選手



投てき競技の練習会場である補助競技場でハンマー投げの練習を行う選手